

福岡県共通感染症発生状況調査に係る分析及び評価

公益社団法人福岡県獣医師会
共通感染症対策委員会

- 1 対象疾病 ①サルモネラ症、カンピロバクター症、その他食中毒細菌感染症
②マダニによるSFTS（重症熱性血小板減少症候群）
- 2 対象動物 犬及び猫
- 3 検査材料（検体） ①細菌検査：糞便
②SFTSウイルス検査：犬猫付着マダニ
- 4 検体採取協力動物病院 福岡地域 4施設、北九州地域 1施設
筑豊地域 1施設、筑後地域 2施設 計 8施設
- 5 調査結果
 - 1) 検体数
 - ①細菌検査 犬 43頭、猫 37頭 計80頭(80検体)
 - ②SFTSウイルス検査 犬 23頭、未記入（犬又は猫）2頭
計25頭(41検体)
 - 2) 対象動物毎の病原体等の陽性数（地域別、飼育場所別、年齢別）及び分離菌及び病原体等遺伝子の検出数（株、検体）
 - ①犬
 - ア. 地域別：福岡 4／23頭
北九州 1／7頭
筑豊 2／6頭
筑後 0／7頭 計 7頭／43頭中(16.3%)
 - イ. 飼育場所：室内 5／30検体(16.7%)
野外 2／10検体(20%)
未記入 0／3検体(0%)
 - ウ. 年齢：0～4歳 2／12頭
5～10歳 3／16頭
11歳以上 1／12頭
不明 1／3頭
 - 検出菌：なし
 - 検出遺伝子：腸管凝集付着性大腸菌耐熱性毒素遺伝子（*astA*） 4検体
腸管病原性大腸菌インチミン遺伝子（*eae*） 2検体
ウェルシュ菌エンテロトキシン遺伝子（*cpe*） 3検体
計 9検体

②猫

ア. 地域別：福岡 5 / 19頭
北九州 1 / 6頭
筑豊 2 / 6頭
筑後 2 / 6頭 計 10 / 37頭 (27.0%)

イ. 飼育場所：室内 10 / 35検体 (28.6%)
野外 0 / 2検体

ウ. 年齢：0～4歳 3 / 20頭
5～10歳 3 / 8頭
11歳以上 3 / 8頭
不明 1 / 1頭

検出菌：カンピロバクター・ジェジュニL群 1株

検出遺伝子：腸管凝集付着性大腸菌耐熱性毒素遺伝子 (*astA*) 3検体
腸管病原性大腸菌インチミン遺伝子 (*eae*) 4検体
ウェルシュ菌エンテロトキシン遺伝子 (*cpe*) 3検体
プロビデンシア属菌遺伝子 (*アルカリファジンス gyrB*) 1検体
計 12検体

3) マダニの同定及びSFTSウイルス遺伝子の検出

マダニの検査	フタトケチマダニ	22頭	30検体	103匹
	キチマダニ	4頭	9検体	10匹
	オオトゲチマダニ	1頭	1検体	1匹
	ヤマアラシチマダニ	1頭	1検体	3匹
	計	25頭 (重複あり)	41検体	117匹

SFTSウイルスのリアルタイムPCR検査 すべて陰性

6 分析

1) 細菌検査

8動物病院の協力の下、犬43頭、猫37頭、計80頭から検体の採取が行われた。最も多くの検体採取がなされた地域は、福岡で5割を占めた。他の3地域はそれぞれ15%前後であった。

検体採取がなされた動物の飼育環境は、犬では、室内飼育が69.8%、野外飼育が23.3%であり、室内で飼育された犬が検査対象の多くを占めた。猫では、室内飼育が94.6%で検査対象の大半を占めた。

検体由来動物の年齢構成は、犬で0～4歳が28%、5～10歳が37%、11歳以上28%であり、その構成に大きな偏りはなかった。猫では0～4歳が54.1%、5～10歳と11歳以上がそれぞれ22%程度であった。

食中毒菌又はその病原体等遺伝子の検出状況をみると、犬で43頭中7頭

(16.3%)が陽性であった。食中毒菌又はその病原体等遺伝子が検出された動物の飼育環境は、室内飼育5頭、野外飼育2頭であった。猫では37頭中10頭(27.0%)が陽性で、飼育環境はすべて室内飼育であった。

検出された食中毒菌又はその病原体等遺伝子の内訳は、腸管凝集付着性大腸菌耐熱性毒素遺伝子(*astA*)が最も多く、犬で4検体、猫で3検体から検出された。そのほか腸管病原性大腸菌に関連するインチミン遺伝子(*eae*)が犬2検体、猫4検体から、また、ウェルシュ菌エンテロトキシン遺伝子(*cpe*)が、犬3検体、猫3検体から検出された。食中毒の原因として広く知られるカンピロバクター症については、下痢症状を呈する猫からカンピロバクター・ジェジュニが1株分離された。

2) SFTSに係るマダニ検査

ダニ媒介性のSFTSウイルスについては、25頭41検体を検査し、リアルタイムPCR遺伝子検査はすべて陰性であった。

7 評価

本調査における検体採取動物の飼育環境は室内飼育が多かった。室内飼育の動物では、野外飼育の動物に比べて、間接的接触を含めた日常生活での接触頻度が高いことが見込まれることから、飼育動物が共通感染症の病原体を保有している場合、飼い主である人への感染リスクがより上昇することが考えられた。加えて、本調査では、有症状動物から食中毒菌であるカンピロバクター・ジェジュニが、また、無症状動物からも、ウェルシュ菌エンテロトキシン遺伝子など食中毒菌の病原体等遺伝子が認められ、飼い主である人への感染リスクが明らかになった。

本調査で感染リスクが認められた病原体は、カンピロバクター・ジェジュニ(菌分離)、下痢原性大腸菌(腸管凝集付着性大腸菌耐熱性毒素遺伝子 *astA*、腸管病原性大腸菌インチミン遺伝子 *eae*)、ウェルシュ菌(エンテロトキシン遺伝子 *cpe*)、プロビデンシア属菌(プロビデンシア・アルカリファシエンス *gyrB* 遺伝子)であった。

マダニ媒介性のSFTSについては、8動物病院から採取されたマダニについてSFTSウイルス遺伝子検査をしたが、すべての検体で陰性であり、現段階では、愛玩動物として飼育される犬及び猫のSFTSウイルス感染については、その可能性が低いものと推察された。

今回の調査結果に基づき、共通感染症の重要性を再認識した上で、継続的な調査と感染防止対策の必要性が立証された。